

興福寺旧境内の調査

—第 2009-7 次

調査経緯

県庁東交差点の登大路地下道南出口に沿って南北方向の既設排水溝を撤去し、同位置に新排水溝を設置する工事ともなう立会調査である。本調査区は1986年の第174-7次調査区と一部重複する。工事掘削のおよぶ南北約15m、東西約1mの範囲で立会調査をおこなったが、調査開始直後、調査区南端の南北約1.8mの範囲で包含層より多量の土師器が出土しはじめた。以後も多量の遺物が出土することが見込まれ工事と並行して調査できないこと、この包含層の性格を究明する必要があることから、県文化財保存課、県土木課、施工業者の了解のもと包含層の発掘調査をおこなった。また北部の5.8mの範囲も、未調査範囲を工事で掘削するため包含層の発掘調査をおこなった。発掘調査した面積は5.8㎡で、期間は2009年5月12日～15日である。

層 序

土師器が多量に出土した調査区南端の南北1.8mの範囲の層序は、アスファルトと砂利を除去すると、上から1層：茶褐色土、2層：黒褐色粘質土、3層：砂質混礫土、4層：礫質土、5層：赤褐色土（地山）の順である。1層から4層にかけては下層ほど礫を多く含む。5層は赤斑のある硬質な粘質土である。遺物は1層から4層まで含まれるが、2層に多量に包含される。2層には炭化物と焼土も多量に含まれている。

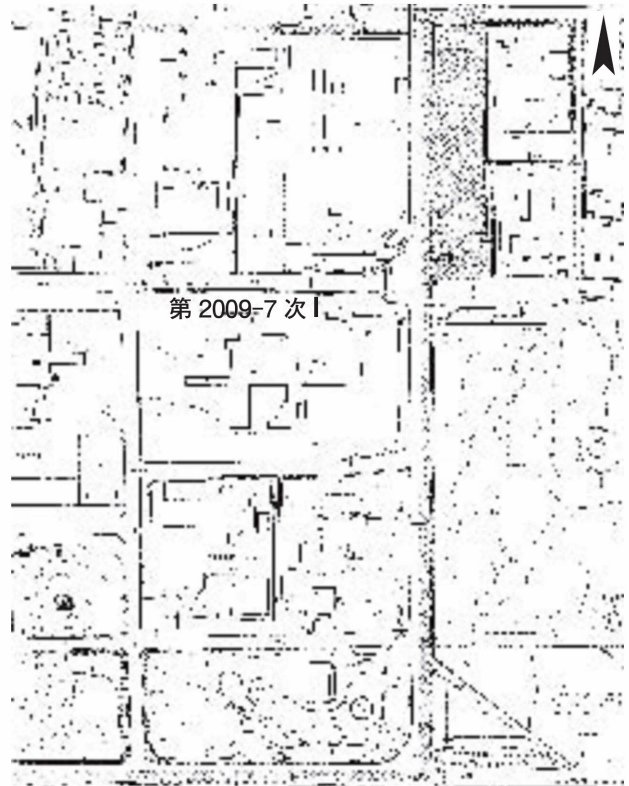


図220 第2009-7次調査区位置図

調査区北半の層序は、近現代の攪乱土を除去すると、砂利を多含する硬化層が分厚く堆積し、その下に上から暗褐色粘質土（東西溝の埋土）、黄褐色粘質土（築地）、赤褐色土（地山）の順である。地山は南北両部で共通する。

遺 構

調査区南端では、1層から4層まで土師器をはじめ多量の土器・瓦が包含していた。1.8m×1mの調査範囲内では遺構の平面は確認できなかったものの、この範囲の地山の標高は調査区北部の地山の標高と比べると約0.6mは低いため、この遺物包含層は調査区よりも大型

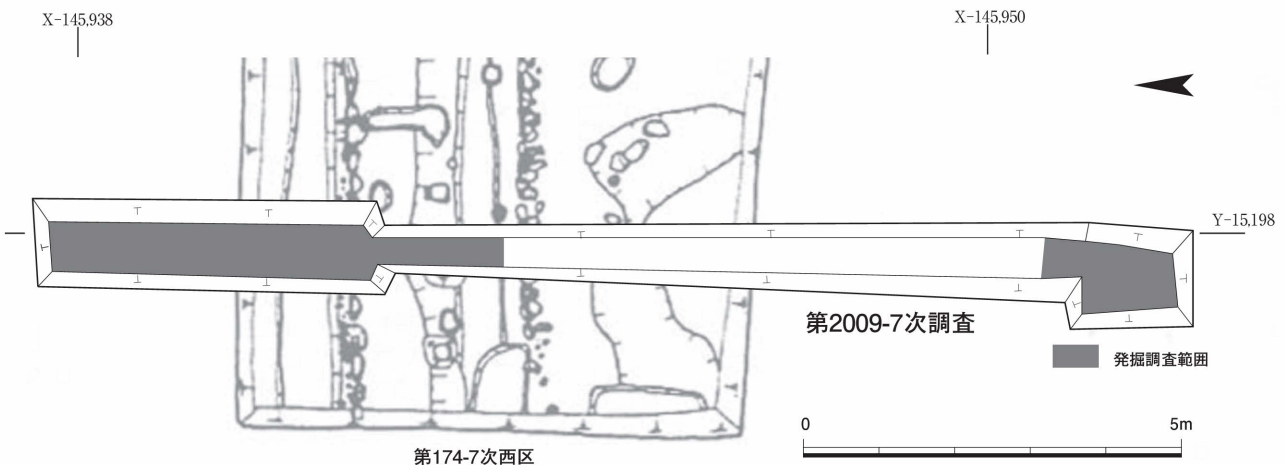


図221 第2009-7次調査遺構平面図 1:100

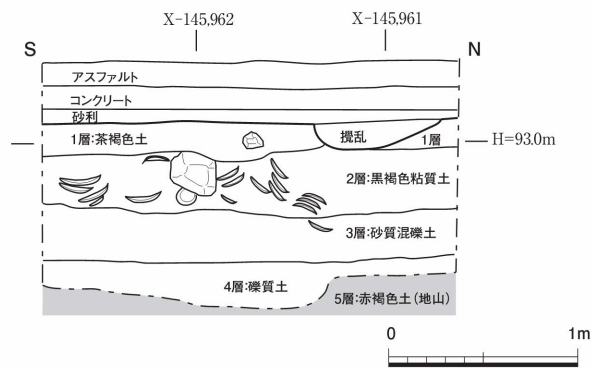


図222 第2009-7次調査南端西壁断面図 1:40

の土坑の埋土の可能性もある。

調査区北部では、砂利を多含する硬化層が少なくとも3面確認されるため、これらはいずれかの時期の路面の可能性はある。

SA9465 東西方向の築地塀。南北幅は105cm以上。南側は地下道建設にともなう攪乱により確認できなかった。硬質の黄褐色粘質土層からなり、第174-7次調査により検出されているSA02と同一の遺構である。築地塀の基礎部分と推定される。地山（黄褐色粘質土）を掘り込んで暗褐色粘質土が堆積し、その上に硬質の黄褐色粘質土が堆積している。この土層は北で鋭く立ち上がるが、これは東西方向の溝に掘り込まれているためである。堰板の痕跡は確認されなかった。

SD9466 東西方向の溝で、南北幅は140～160cm。深さは検出面から40cm。第174-7次調査で確認されている築地北側の東西方向の溝と同一の遺構である。覆土には瓦器、土師質土器を含む。この溝は築地基礎とした黄褐色

粘質土とその下層の暗褐色粘質土を掘り込んでいる。さらにこの溝の覆土は、北側で路面とみられる砂利・小礫を多含する土層群に覆われている。

SA9465とSD9466は既に第174-7次調査で検出されていた遺構で、古代まで遡る可能性が指摘されている。東西溝は築地塀の北側溝である。今回の調査では当時の検出面よりも深く掘削がおよび、これらの遺構の南北方向の土層断面が得られた。東西溝の下層からしまりが強く礫を多含する暗褐色土層が検出された。南北両端が掘り込まれているので、より古い時期の側溝なのかは不明である。
(国武貞克)

遺物

調査区南端の土器包含層（1～3層）から出土した土器は整理箱で60箱を数える。出土量が多いため、ここでは完形か、それに近いものを図化し、土器群の様相を示す。

1層の土器 少数の土師器皿からなり、大小2種がある（1～4）。口径12.3～13.1cmのものは橙色を呈し、口縁部に強いヨコナデの痕跡を残す。口径10.4cmのものは2点のみである。13世紀代。

2層の土器 出土点数がもっとも多く、土師器皿の完形品だけで265個体を数える。土師器皿は胎土および色調から、白色系と褐色系とに大別でき、両者の比率は約1:3で褐色系が多い。

白色系（2.5Y8/1灰白色）は精良な胎土だが3～5mm大のチャート礫を含む。口径10cm台の小皿（平均値10.58cm、5～7）が主体であるが、口径15cm台のものもある（29・30）。強いヨコナデのため、口縁部が外反する個体が目立つ。

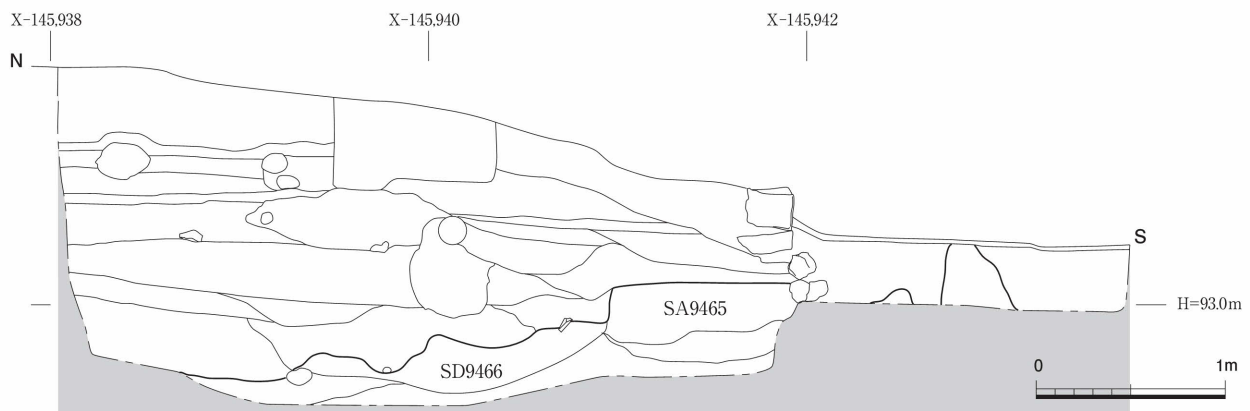


図223 第2009-7次調査区北部東壁断面図 1:40

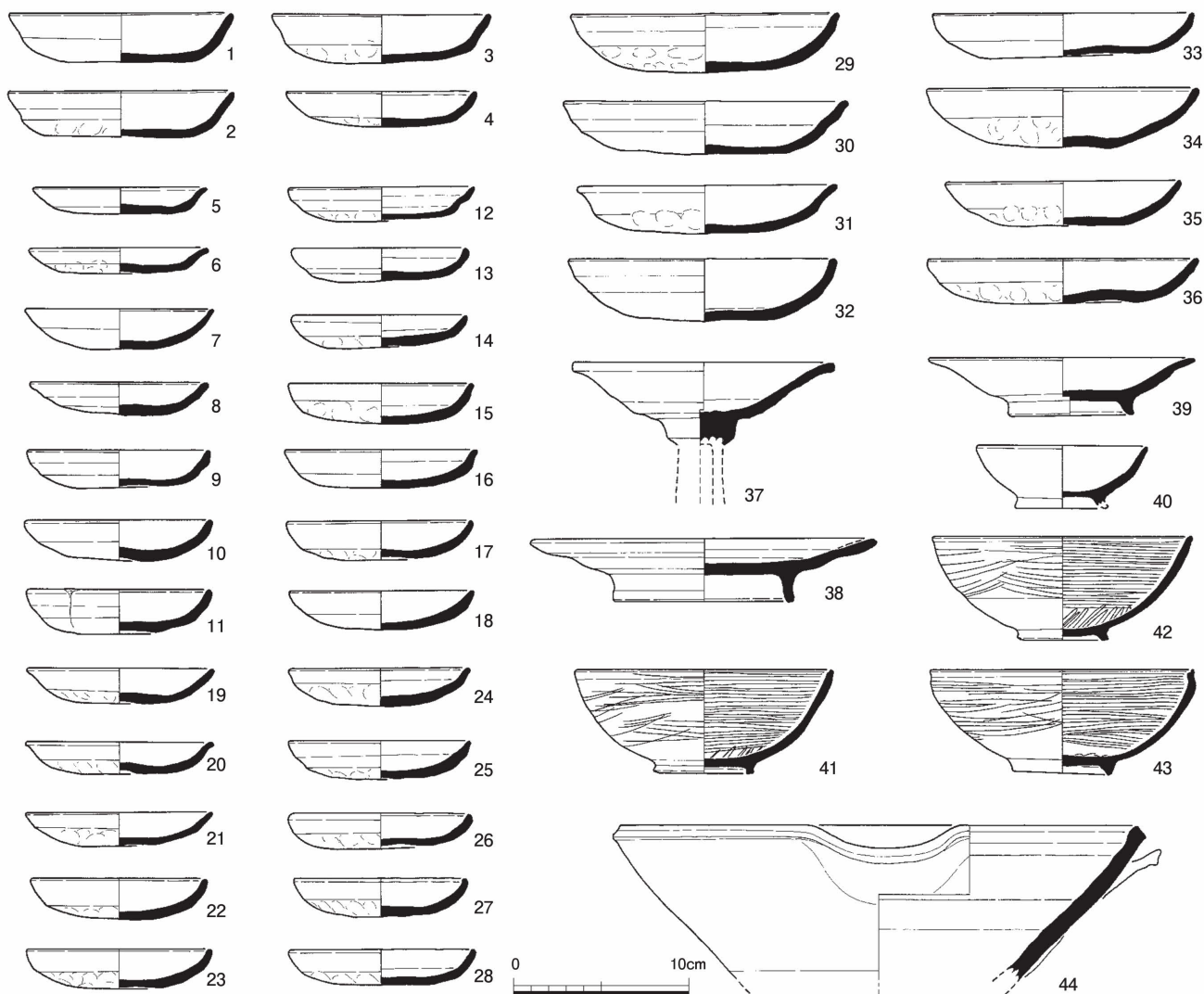


図224 第2009-7次出土土器 1:4

褐色系は砂質の胎土で、器表面は浅黄橙色～橙色を呈し、その色調や雲母の有無などから細分が可能である。口径10～11cm台の小皿（平均値10.50cm、8～18）と、15cm台を中心とする大皿（31～33）とがあり、口縁部を2段ヨコナデで仕上げたものが多い。燈芯の痕跡をとどめる小皿が6個体ある。

土師器皿以外にはロクロ成形による白色土器の高杯（37）や土師器高杯（38・39）、土師器椀（40）、瓦器皿・椀（41～43）があり、須恵器には東播系の甕、片口の鉢（44）がある。

白色土器の高杯はやや砂質の胎土で、色調は灰白色（2.5Y8/2）を呈する。脚部を失うが、その断面形は円形とみられる。土師器高杯には褐色で粗い胎土の38と、淡褐色でやや精良な胎土の39とがある。

瓦器椀は完形品で14個体を数え、見込みのヘラミガキがジグザグ状のものと連結輪状のものとがあり、前者が

わずかに多い。瓦器小皿は見込みにジグザグ状のヘラミガキを施す。このほか、小片ながら白磁椀が出土している。

土師器皿および瓦器の器形などから、2層出土土器は12世紀前半の土器群であろう。

3層の土器 最下層の土器群で、土師器皿・瓦器椀からなる。土師器皿は完形品で37個体を数え、白色系と褐色系とがある。両者の比率は約3:5で褐色系が多い。白色系は口縁部をヨコナデで整え、口径10～11cm台の小皿（平均値10.54cm、19～21）と、口径15cm台の大皿（34）とがある。褐色系は口縁部を2段ヨコナデで整えるものを含み、口径10～11cm台の小皿（平均値10.52cm、22～28）と、口径15cm台の大皿（35）のほか、口径13cm台のもの（36）が少数加わる。黒褐色粘質土の土器群とは大きさ・器形がほぼ同じであるが、11世紀代の土師器小皿もわずかに出土している。

2・3層出土土器に通じていえるのは、土師器皿に胎



図225 調査区南部（北東から）



図226 調査区南部西壁（東から）

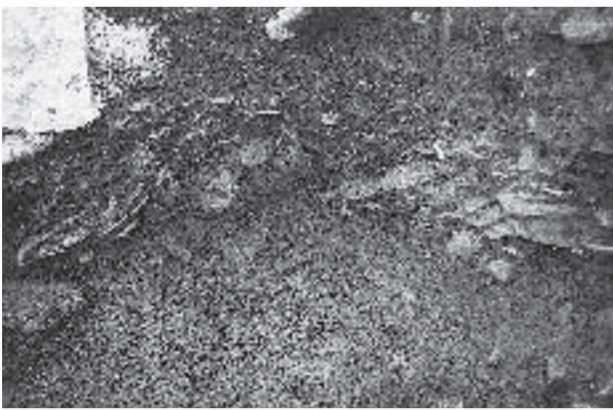


図227 調査区南部土器出土状況（北から）

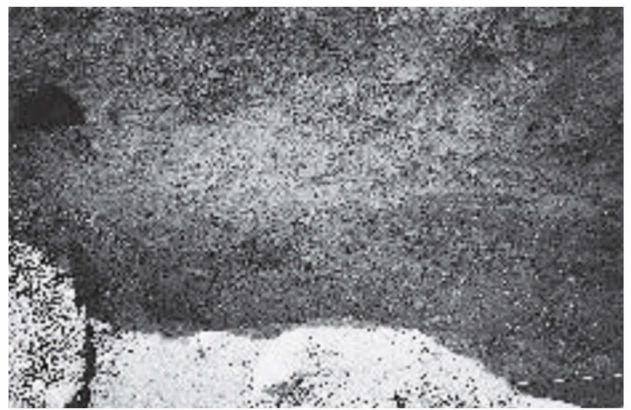


図228 調査区北部東壁土層断面（西から）

土精良な白色系と、やや砂質の褐色系とがあり、それぞれ大小2種類からなることと、白色系より褐色系のほうが多いことである。とはいえ、白色系と褐色系との比率は2層と3層とで異なる。包含層の層相からみても、両者は投棄の時機が異なると考えられるが、いずれも12世紀代に属するとみる。

その他 その他に青磁片、白磁片、軒丸・軒平瓦（古代）、平瓦（古代、中世）などが出土している。（森川 実）

まとめ

調査区南端で検出した土器を多量に含む包含層は、調査範囲の外側（南側）へと広がっており、巨大な土坑の一部である可能性が考えられる。土器の出土量は、わずか1.8㎡から60箱分と膨大である。土器の年代は11世紀～13世紀で、2・3層の土器は大多数が12世紀代のものである。1層から3層はそれぞれの時期で一括性の高い資料の可能性もある。土師器皿には胎土精良な白色系と、やや砂質の褐色系とがあり、それぞれには小皿（口径10.5cm）と大皿（口径15cm台）とがある。また現在のところ、2層と3層とでは、土師器皿の白色系と褐色系との比率がやや異なることが判明している。時期差とあわせて、今後は各層出土土器のより詳しい組成の比較が必

要となる。

調査区北部では、東西方向の築地塀SA9465と、その北側に沿った東西方向の溝SD9466を検出した。SA9465は、1986年の第174-7次調査では古代まで遡る可能性が指摘されている。SD9466からは、調査区南端で出土したものと同一時期の瓦器片が出土したことから、築地に沿った北側の溝は12世紀末～13世紀前半には埋没したことがあきらかとなった。また、この溝の覆土の上に、砂利を含む硬質な土層が少なくとも3面検出されたことから、溝の埋没後に路面が数度にわたって構築されたことが推定される。この土層からは土師器の破片が少数出土したが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。中世以降現代以前の路面と推定される。

調査区北部の築地塀SA9465と土器包含層とは、わずかに約10mを隔てるのみである。もしSA9465が古代末期から中世初頭にも機能していたとすると、築地塀のそばで、11世紀から13世紀にかけての土師器皿を中心にした土器が多量に廃棄された状況が想定できる。古代末期から中世初頭にかけての興福寺旧境内の実態は詳細が判明していない。これだけの土師器皿を継続的に廃棄する契機は何に求められるのか。今後の課題としたい。（国武）